



Title	スター夫人における北の文学とメランコリー
Author(s)	植村, 実江
Citation	Gallia. 2019, 58, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72869
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スタール夫人における北の文学とメランコリー

植村 実江

序論

「人間精神の進歩」。この概念は、スタール夫人が生涯貫いた基本理念である。これは、知の蓄積により、古代より現代、現代より未来へと、人類が進歩しながら完成に近づくという考え方である。フランス革命が終結したとき、革命を否定的に捉える人々によって、18世紀の啓蒙思想にその責を負わせようとする論調があらわれた。このような革命否定論者は、啓蒙思想は人類の進歩という意味では逆行であるとし、「人間精神の進歩説」を否定したのだ。18世紀のフィロゾフたちに囲まれて育ち、数々の代償を鑑みてもなお、革命の必然性を信じていたスタール夫人は、何としても「人間精神の進歩説」を論証するという使命に駆られていた。革命後の荒廃した社会においては、パンフレット、誹謗文書、新聞といった短命のメディアがもてはやされ、趣味の規範は忘れ去られた。文学の低俗化は、文学者の地位の転落を意味していた。文学者が民衆を導く役目を負うと信じていた彼女にとって、由々しき事態である。失墜したフィロゾフの名誉を挽回し、選ばれし者としての文学者の地位を取り戻すには、理想の「文学」のあり方を提示することが不可欠であった。これらの差し迫った問題意識のもと、1800年に発表した『文学論¹⁾』において、スタール夫人は「南の文学」を「古代の文学」、「北の文学」を「近代の文学」と図式化した上で、時代が必要とするのは、近代の文学である「北の文学」だと主張する。彼女は、自らの思い描く優れた文学のよりどころを、北の人々の精神性に見出そうとした。スタール夫人が『文学論』で示した「北の文学」の要素は、確実にロマン主義の芸術に引き継がれていく。本稿は、北の人々のもつ精神性が、どのように「北の文学の優越性」の根拠となったのか明らかにすることを目的として、考察をすすめる。

1. 北の文学と南の文学

スタール夫人は「北の文学と南の文学」を定義し、それらをそれぞれ、「近代の文学」、「古代の文学」であると図式化する。ここではこの理論にのっとって、それぞれの文学の特徴を考察する。

『文学論』の「北の文学について」の章で、南北二つの文学をスタール夫人はこ

1) スタール夫人のテクストは以下を使用。Madame de Staël, *Oeuvres ; édition établie par Catriona Seth, avec la collaboration de Valérie Cossy*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2017. 本稿における日本語訳はすべて拙訳を使用した。引用文に付した下線はすべて著者による。なお、『文学論』において、「文学」は「自然科学を除く、すべての哲学的な著作と、想像による作品」を指す (*De la littérature, «Discours préliminaire»*, p. 14)。

のように定義する。

明確に区別することができる二つの文学が存在すると、私には思われる。ホメロスを源流とする南の文学と、オシアンを祖とする北の文学である。ギリシャ、ラテン、イタリア、スペインそしてルイ14世時代のフランスの人々のそれは、私のいうところの南の文学である。イギリス、ドイツ、またいくつかのデンマークやスウェーデンの著作は、北の文学と分類できるだろう²⁾。

このようにスタール夫人は、アルプスを境にそれを含む国々の文学を「南の文学」、それよりも北の国々の文学を「北の文学」と分類している。ここで注意したいのは、フランスに「ルイ14世時代の」という但し書きがつくことである。これは、18世紀のルソーや、フランスの詩人に、すでに北の文学の要素が見られることの伏線であると言えるだろう。

スタール夫人が「北の文学」の源流であるとする『オシアン』は、スコットランドの作家マクファーソンが、古代の詩人によるゲール語の英雄譚を採集した作品で、1760年に刊行が始まった。これは、その語り手である英雄の名をとって『オシアン』と呼ばれている。ヨーロッパで大変な成功をおさめ、フランスでも1777年にル・トゥルヌールの翻訳版が出版された³⁾。この作品はヨーロッパで大人気を博し、スタール夫人もかなり熱心な読者であった。『文学論』では、この後もしばしば言及され、シェークスピアと並んで、スタール夫人の「北の文学」のイメージの大部分を形成していることが示される。

スタール夫人は、イタリア人が東洋の人々をしばしば模倣してきたと指摘した上で、東洋の人々と北の人々の「メランコリー」の違いを次のように説明する。

メランコリー、この多くの天才の作品を生み出す感情は、ほぼ例外なく、北の風土にのみ属するように思われる。 [...] 東洋における宗教的思想は、マホメットのものであれ、ユダヤ人のものであれ、魂を支え、導くポジティブな感情である。それは、魂に、より哲学的でより陰鬱な印象をもたらす⁽¹⁾ 甚だしい感情の波ではない。東洋の国々のメランコリーは、あらゆる喜びを享受している幸福な人々のそれである。彼らは、栄華を誇るものの急速な移り変わりや人生の短さについて、哀惜の念をもって、思いめぐらせるのみである。北の人々のメランコリーは、魂の苦悩や、感受性が存在の中に見出させる虚無や、生の消耗から死という未知なるものへと、想念を絶えず歩ませる夢想⁽²⁾ によって呼び起こされる⁴⁾。

2) Madame de Staël, *De la littérature, Œuvres*, pp. 128-129.

3) この作品は、F.メンデルスゾーンの『フィンガルの洞窟』(1830)に代表されるように、19世紀ロマン主義の芸術に大きな影響を与えた。

4) *Ibid.*, pp. 128-129.

この文に付された注⁵⁾において「ヘブライの詩は、北の詩に見出されるメランコリーとは全く違う特徴をもっている」と説明されているように、スタール夫人は「東洋の文学」を「北の文学」と対立するものとして、「南の文学」と同列にして扱っている。下線(1)では東洋の文学に欠けている要素として「哲学的」「陰鬱」があげられているが、このふたつは『文学論』において、「北の文学」の特徴として、繰り返し強調される要素である。下線(2)では、「北の文学」の重要な要素であり、天才の作品を生み出す感情である「メランコリー」が提示される。この文章に示されている「メランコリー」の特徴は「魂の苦悩」「虚無」「夢想」の三点にまとめることができる。三つ目の「夢想」の中では、「想念」はつねに死へと向かっていく傾向がある。

「北の文学と南の文学」の対比は、スタール夫人が1807年に発表した『コリンヌあるいはイタリア』にも見られる。この小説では、イタリアが南、イギリスが北を表す。この作品の中で「北の文学と南の文学」の対比は、コリンヌの言葉として表現される。次の引用文では、イタリアの血をひくコリンヌが、英国人であるオズワルドに向けて話しており、コリンヌのわが国は「イタリア」つまり南を、「あなたがた」は北方の人々を指している。

ダンテ、ペトラルカ [...]、これらの南の詩人たちは、芸術と自然のすばらしさを、言葉による絵画に導入することができます。わが国の詩人には、あなたがたの特徴である、あの深いメランコリーや、あの人間の心についての知識₍₁₎はないでしょう。しかし、この種の卓越は詩人よりむしろ、哲学的な作家に属するものではないでしょうか。輝かしいイタリアの旋律は、深い思索によりも、外から見える事物のきらめきに、より調和するのです₍₂₎⁶⁾。

下線(1)に見られる「深いメランコリー」と「人間の心の知識」が、『文学論』と同じく、スタール夫人が探求するテーマとしてここでも示されている。人間の心 «le cœur humain» は、«âme» の同義語として、スタール夫人の作品の中でよく使用される。また下線(2)には、これら、北の特徴とは対照的に、南の詩人は美しい自然を描写することには長けていますが、内面の「メランコリー」を描くことは得意ではないということや、南の詩がそれに適合しないという考えが示されている。下線部の「イタリアの旋律は外から見える事物のきらめきに調和する」には、「外側」を表す «extérieur» という語が使われている。スタール夫人の南北、二つの文学の対比には人間の「内」と「外」という語がよく使われる。また、内側である心に言及するときによく現れるのが «profond» 「深い」という形容詞である。この語の繰り返しには「心の奥深くまで」探求することをめざすという、スタール夫人の方向性が示されている。

5) *Ibid.*, p. 128.

6) Madame de Staél, *Corinne ou l'Italie, Œuvres*, p. 1122.

2. メランコリーの語義の変遷

「メランコリー」という語の起源は、古代医学のヒポクラテス（前460年頃 - 前373年頃）までさかのばる。それによると「メランコリー」は四体液のひとつ、黒胆汁であった。古代から19世紀末までの「メランコリー」の語義の変化は、*Dictionnaire Littré*⁷⁾の「メランコリー」の定義を参照することで、たどることができる。*Littré*には5つの項目が挙げられている。要約すると、「1. 古代の医学用語で、黒い胆汁。心気症の原因。2. 知性の病変であり、偏執狂の変化したもの。3. 身体的、心理的な原因による悲しみの性向（いわゆる脳の蒸気）。4. 過酷な喪失を過ぎて和らいだ痛み。5. 漠然とした悲しみ。つねに甘美さが付与されている。特定の人々、とくに若者が見舞われやすく、ヨーロッパの近代詩に欠かせない」となっている。

このリトトレの定義から意味の変化をたどると、「メランコリー」は、古代において医学用語で黒胆汁が原因となる心の病であったが、次に悲しみに支配される心身の病気とされ、その後、4、5の定義に見られるように、悲しみに「和らぎ」や「甘美さ」が加わるようになる。

5番目の定義には「ヨーロッパの近代詩」があらわれるが、スタール夫人は、「メランコリー」とイギリスの詩人を結びつけている。『文学論』の第二版に付された序文の中で、「今世紀のほとんどすべてのフランスの詩人は、英國の詩人の影響を受けている⁸⁾」と指摘し、フランスの詩人の例としてサン＝ランベール⁹⁾とドリール¹⁰⁾の名を挙げている。ドリールは、『想像力』(1806)を発表するが、その中には「メランコリー礼賛」のくだりが見られ、「メランコリー」は甘美な感情として描かれている。

絶望は涙を見つけるやいなや、
メランコリーにそれをあづけにくる
その苦痛を和らげるためにであって、忘れるためではない
メランコリーこそが、煩わしい喜びよりもずっとやさしく
苦しみを体験した不幸な者を迎えてくれるのだ
それは、悲しげだが柔軟な表情で、不幸に微笑みかけに来て
悲しみを癒し、痛みを和らげてくれる¹¹⁾

このようなドリールの主張や、前述の*Littré*による「メランコリー」の定義にもあるように、時代が下るにつれて、「メランコリー」を心地よく、甘美な感情と捉える傾向が強くなる。では、スタール夫人の「メランコリー」も、これらのように甘美な感情としての「メランコリー」なのだろうか。先に述べた、スタール夫

7) <https://www.littre.org/definition/mélanolie> (2018年10月15日閲覧)

8) Mme de Staél, *De la littérature, Œuvres*, p. 6.

9) Jean François de Saint-Lambert (1716-1803)

10) Jacques Delille (1738-1813)

11) Jacques Delille, *L'Imagination*, Tome 1 deuxième édition, L. G. Michaud, 1825, p. 148.

人による「メランコリー」の特徴である「心の苦悩」や「想像力が見出す虚無」には、人間が心地よいと感じる要素は見られない。もうひとつの特徴である「夢想」に関しては、ルソー以前は夢想を「狂気」と捉えていたが、ルソーやドリールは「夢想」に肯定的な意味を付与している¹²⁾という指摘がある。すなわち、「夢想」と「メランコリー」はともに、心地よい感覚という意味が付与されるようになり、二つの語のイメージの変化には関係がみとめられる。スタール夫人の「メランコリー」に見られる「甘美」については後述する。

3. メランコリーと心の苦悩

スタール夫人が『文学論』において主張した「北の文学の優越性」によると、天才を生み出す感情は「メランコリー」であり、この感情は北の人々のみに属す。スタール夫人の考えでは、「メランコリー」という心の動きは本質的に近代的なものであり、古代人には見られないものである¹³⁾。「メランコリー」のテーマを追求したシャトーブリアンの『ルネ』が1802年、セナンクールの『オーベルマン』が1804年に出版される。

『文学論』の7年後に発表された『コリンヌあるいはイタリア』の冒頭では、英國人オズワルド卿の姿が描かれる。この小説においては、イギリスが北、イタリアが南を象徴している。したがって、英国人であるオズワルドの人物描写には、スタール夫人の考える北方の人々の気質が表現されている。

彼[オズワルド]は気高く美しい顔立ちで、才気に富み、立派な家柄に生まれ、自由な生活ができる財産をもっていた。しかし、彼の健康は深い心の痛手によって損なわれており、医者たちは彼の胸の病状が悪化するのをおそれて、南の空気を吸う療養をすすめた¹⁴⁾。

下線部の「深い心の痛手」が「メランコリー」のテーマを象徴的に示している。すでに示したように、スタール夫人は、「メランコリー」を呼び起こす要素として、「魂の苦悩 (les souffrances de l'âme)」、「感受性が見出す虚無」、「夢想」の三つをあげている。このオズワルドの描写に使われている「深い心の痛手 (un profond sentiment de peine)」は「魂の苦悩」と共通のイメージをもっている。『sentiment』と『âme』、『peine』と『souffrance』をそれぞれ類義語と考えると、「心の痛手」は「魂の苦悩」の言い換えであると言えるだろう。

人間の内面の苦悩を探求する動きは、『文学論』や『コリンヌ』より少し先駆け、18世紀後半からみとめることができる。1774年に発表されたウォルフガング・

12) 井上櫻子「啓蒙期の感受性論からロマン主義の叙情詩へ：ジャック・ドリールの『想像力』(1806)を中心に」、『慶應義塾大学日吉紀要』、フランス語フランス文学』第49/50号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2009年、9-28頁、15頁。

13) Béatrice Didier, *Corinne ou l'Italie de Mme de Staél*, Folio, 1999, p. 130.

14) Mme de Staél, *Corinne ou l'Italie, Œuvres*, p. 1005.

フォン・ゲーテの『若きウェルテルの悩み¹⁵⁾』(Die Leiden des jungen Werthers、フランス語タイトル *Les souffrances de jeune Werther*、以下『ウェルテル』と略記)は、ヨーロッパ中で成功をおさめ、ウェルテルをまねて自殺者が出るという社会現象さえ引き起こした。スタール夫人は、ルソーの『新エロイーズ』(1761)と並んで、『ウェルテル』から大きな影響を受けたと言われており、彼女の作品中でもよく言及される。この小説のタイトルは「苦悩する青年」のイメージを想起させ、「魂の苦悩」のテーマの流行を先取りしていると言える。

このように、「メランコリー」の特徴であるとした「魂の苦悩」は、「メランコリー」と密接に結びつき、あるいは「メランコリー」そのものとして、文学の潮流の中心的なテーマとなっていく。『souffrance』に類似する語として、『douleur』や『peine』という語も、「オズワルド」や「オーベルマン」の人物描写に多用される。そしてそれらは最終的には病、苦痛を表す『mal』という語に還元される。ロマン主義の先駆けとなるこの時代において、「メランコリー」の感情に支配される症状は「世紀病 (mal du siècle)」と呼ばれるようになる。『ロマン主義の精神』(1966)の著者であるシェンクは、世紀病の根源は、キリスト教という精神的基盤を失うことにより、何の信仰ももたない人々が空虚さや無意味を感じることだとしている¹⁶⁾。

4. 北の文学とメランコリー

スタール夫人は、ロマン主義の主要なテーマとなる「メランコリー」を、「北の人々の感情」であるとし、「北の文学の優越性」を唱えた。ここからは、スタール夫人が「メランコリー」と「北の文学」をどのように結びつけたのか見ていきたい。

スタール夫人は、北の人々を次のように描写している。

北の陰鬱な風土は、北の人々の想像力に嵐や闇しか与えない。彼らは日数を夜で数え、年数は冬で数える¹⁷⁾。

すでに見てきたように、スタール夫人は、南の詩人は美しい自然を色鮮やかに描き、南の人々は幸せを享受する人々であると説明していた。「北の人々」には陰鬱な世界に住むストイックな人間というイメージが付与され、南の詩人に描かれる色鮮やかな世界や、そこに住む幸せを謳歌する人々との対比をなしている。

前述のように、スタール夫人によると「北の文学」は『オシアン』を源流としている。スタール夫人はキリスト教の宗教的な瞑想 (méditation) が哲学的な思考を導き、様々な学問や思想的領域において、人類の知的能力の向上に役立ってき

15) 『若きウェルテルの悩み』。この作品は、主人公のウェルテルが人妻へのかなわぬ思いに苦悩した挙句、自殺するというストーリーの書簡体小説である。

16) H. G. シェンク『ロマン主義の精神』生松敬三、塚本明子訳、みすず書房、1975年、66頁。

17) Mme de Staél, *De la littérature, Œuvres*, p. 96.

たと考えており¹⁸⁾、次の引用では、『オシアン』の詩学がそのような精神活動に合致すると述べられている。

オシアンには宗教的な思想がないと言われてきた。神話もない。しかし、そこに絶えず見出されるものは、魂の高揚であり、死者への敬意であり、来世の存在の確信である。これらの感情は、南の異教よりもずっと、キリスト教がもたらす心の動きに近いのだ¹⁹⁾。

この引用にも見られるように、スタール夫人は『オシアン』に見出される魂の高揚と、キリスト教がもたらす心の動きに、共通の精神性を見出している。スタール夫人の描く北の人々のイメージの中では、この精神性は北の風土と結びついている。

スコットランドの吟唱詩人を継承するイギリスの詩人たち [...] は、北の想像力を持ち続けた。海辺、風の音、ヒースの原野。これらへの愛着を抱かせるのは、この想像力である。すなわち、北の想像力は来世という別の世界へと、運命によって疲れきった魂を連れてゆく。北の人間の想像力は、彼らが住むこの世の最果てから、さらに遠くへと身を投じる。この想像力は、彼らの水平線を縁取り、生から永遠への薄暗い通路を形作っているかのような雲を突き抜けて、身を投じるのだ²⁰⁾。

北の人々が住むのはこの世の最果てであり、死の世界との境界はすぐそばにある。つまり、北の人々の生は、死と隣り合わせなのだ。死を身近に感じる世界観は、キリスト教の瞑想の世界と親和性をもつ。これが、北の詩学がキリスト教に近いというスタール夫人の考えの根拠である。

さらに、スタール夫人は南と対比することによって、北の詩学が南の詩学よりすぐれていることを強調している。

哲学的な思考は、いわば、それ自体を陰鬱なイメージへと集約する。南の詩は北の詩とは違って、瞑想の調和とは程遠い。何かを明らかにする深い思索を促すこと、めったにないと言えるだろう。すなわち、快楽の詩は、ほぼすべての秩序だった考えを排除してしまうのだ²¹⁾。

スタール夫人はまた、北の詩は、アレゴリーがもつ表面的な効果に頼らず、深い思索に根差すものだと説明する。そして、深い思索という精神的活動から生まれる魂の高揚は万人がもつものでありながら、それを表現し、作品として具現化

18) *Ibid.*, p. 95.

19) *Ibid.*, p. 131.

20) *Ibid.*, p. 129.

21) *Ibid.*, pp. 132-133.

するのは天才だと述べている。

北の詩には、ほとんどアレゴリーが見られない。北の詩は、その効果において、想像力を刺激するための局所的な思い込み (des superstitions locales) を必要としない。深い思索によって精神が純粋に高まり、魂の高揚を覚えることができる。それは、真に詩的な靈感の源であり、その感情はすべての人々の心の中にある。しかし、それを表現することは、天才のなせる業である。天才の手にかかると、北の詩がもつ靈感は、天上の夢想を持続させ、田園と孤独を愛する気持ちを促す。そしてしばしば、心を宗教的な想念へと運び、選ばれし者たちの心の中で、美德への献身と、崇高な想念の靈感を掻き立てることとなるのだ²²⁾。

誰もが抱く、深い思索から生まれる魂の高揚を、天才は宗教的な心境へと導く。天才がその状態を維持する「天上の夢想」という表現は、ロマン主義の「夢想」の主題を先取りしており、天才が夢想の状態から作品を生み出すイメージが描かれている。

下線部の「田園と孤独を愛する気持ち」はルソーを想起させる。ルソーは『告白』(1782) と『孤独な散歩者の夢想』(1778) で、メランコリックな感情を描いた。井上²³⁾の指摘によると、過ぎ去った日々を回想する甘美な感情が、『告白』では繰り返し描かれる。ドリールの詩にも見られるように、過去を思い出し、涙を流すとき、人間は甘美な感情にひたる。古代の「病」を意味していた「メランコリー」は、「甘美」の要素を帯びることによりロマン主義的な「メランコリー」へと変化したと言えるだろう。スタール夫人の「メランコリー」の要素である「夢想」は、ルソーが描く、追憶するときに喚起される甘美な感覚をともなう「メランコリー」の状態と類似しており、その境界はあいまいである。つまり、ルソー的な「夢想」の状態にある感情を「メランコリックな感情」と、捉えるようになってきたと言えるのではないか。スタール夫人が「メランコリー」に「甘美」な要素をみとめていることは、次の文章に表現されている。

メランコリックな詩は、絶えず様々に変化する。ある自然の美に触れたとき、私たちの心の中で生まれる静かな震動は、いつも、ひとつの同じ感覚である。私たちにその感覚を想起させる詩の源泉となる感情は、アルモニカの音色の効果によく似ている。魂はやさしく揺さぶられ、その音色が魂を支えてくれる状態が、可能な限り長く続いてほしいと願うのだ²⁴⁾。

アルモニカは、1761年にベンジャミン・フランクリンによって考案された。グラ

22) *Ibid.*, pp. 131-132.

23) 井上, p. 15.

24) Mme de Staël, *De la littérature, Œuvres*, p. 133.

スハープを改良したこの楽器は、その甘美な音色で、当時高い人気を得ていた²⁵⁾。メランコリックな詩が心を震わせる現象を、アルモニカの甘美な音色と重ねていることや、「やさしく搖さぶられ」という表現から、スタール夫人が、「メランコリー」を、甘美な感覚をともなうものと捉えていることがわかる。

5. メランコリックな詩と哲学

以上のように、スタール夫人は北の人々のもつ「メランコリー」という感情と、深い思索という精神活動を結びつけ、北の詩を「メランコリックな詩」であると定義した。

メランコリックな詩は、哲学に最もよく調和する。悲しみは人間がもつ、いかなる他の感情よりも、その人となりや宿命に、より深く浸透するものなのだ²⁶⁾。

フランス革命後、アンシャン・レジームの規範は崩壊した。啓蒙主義を否定する者も現れ、文学者の地位は転落した。文学者の地位を回復させるためには、理想的な文学を世に示す必要があった。スタール夫人が「深い思索」や「哲学的な思考」を強調するのは、このような差し迫った必要性からである。

物事への注意深いまなざしと、抽象的な思考は、思想家にとって実に大きな武器である。これらの能力のみが、人類の精神的進歩に役立つことができる。想像力や才能はそれらに由来し、記憶を喚起するに過ぎない。しかし、本当に新しい考えに達することを可能にするのは、形而上学的な方法だけなのだ²⁷⁾。

結論

フランス革命直後の荒廃した社会において、スタール夫人は、哲学的な思考こそ近代の文学に必要であると確信していた。そして、「北の文学と南の文学」を対比させ、「北の文学」が哲学的な思考を促すと主張した。「メランコリー」の感情は、深い思索の土壤であり、哲学的な思考を尊く。「メランコリー」はまた、田園と孤独を愛する感情と親和性をもち、夢想の状態をつくり出す。この感情は、北の風

25) アルモニカは熱狂的な人気を得たが、その音色や過度の練習のせいで精神に異常をきたす者が現れた。また、近代催眠療法の始祖とされるドイツの医師メスマル（Franz Mesmer, 1734-1815）が、自らの療法にアルモニカの演奏を用いたことが問題視されたことも相まって、危険な楽器とみなされるようになる。やがて、この楽器は1830年頃に衰退する。アルモニカのこののような騒動や歴史については、以下の文献に詳しい。畠田晃「グラスハープとグラスハーモニカの概略史」、『弘前大学教育学部紀要』第103号、弘前大学教育学部、2010年3月、73-77頁。田村治美「18世紀における「生命科学」と音楽の関わり：アルモニカの流行と凋落、B. フランクリンと F.A. メスマルをめぐって」、『人文科学研究：キリスト教と文化』第49号、国際基督教大学キリスト教と文化研究所、2017年12月、77-121頁。

26) Mme de Staël, *De la littérature, Œuvres*, p. 129.

27) *Ibid.*, p. 104.

土が育む人々に特有のものであるとスタール夫人は考えており、「北の文学の優越性」の根拠を、ここに見出すことができる。

(大阪大学博士後期課程在学中)